

---

# スピリット

ジャン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スピリット

### 【Nコード】

N5094A

### 【作者名】

ジャン

### 【あらすじ】

この世界には『スピリット』と呼ばれる個人で別々の物がある。その人の精神に関係しており人によってさまざまであり槍等の『物』になる。そんな世界で藤野銀次が守る草野家の三姉妹、由香、舞、リンと様々な事を乗り越えるファンタジーです。

## 第一話（前書き）

初めての小説で文章がわかりにくいと思いますがよろしくお願いします  
ますm (——) m

## 第一話

俺に親はいない親なんて知らない知っているのは自分の槍と断末魔  
そして・・・血の臭い俺はずっと血を流し続けると思っていた。  
でも

俺はあの家族に救われた、命を狙ってきたはずなのになぜかその家  
は俺を新しい家族として迎えたそして一つの契約をした。それは・  
・『彼女達を守る事』

俺は毎朝6時に起こされるそして朝の鍛練に顔をださないと行けな  
い。そして俺の相手は絶対あの三人だ

「てやああ!!」いきなり背後から跳び蹴りをしてきたが俺は半身  
引いてその蹴りをおかわす

「また避けられたあ」

と跳び蹴りをしてきた少女草野舞は悔しそうに唸っていた、と思うと  
「えい!!」

と幼い声とともに蹴りを入れようとしていた子供の軸足に軽く足を  
引っ掛けて転ばせた

「うぎゅ」と変な声をあげて倒れた子供草野リンは鼻を押さえて涙  
目になっていたそして床に座り込んでいる二人に（一人は俯せに倒  
れているが）

「由香はどうした？」

と聞いて見ると二人とも顔を上に向け（リンは俯せになっているの  
で目だけだか）指をさしたその方向に向くと天井があつた『いない  
ぞ』と言葉を発しようとしたら突然俺は押し倒されたそして押し倒  
した本人は

「勝ったあ!!」

と言って俺の腹に乗りながら満面の笑みで俺を見てきた少女草野由  
香は笑顔で俺の上に乗っていて退けようとしないう・・・俺がど  
かせようとしたら由香はグラツと体を揺らし大の字に倒れている俺

の右手に倒れ、結果俺が由香に腕枕をしている状態になる

「お、おい由香！」

俺が何事かと思い由香に話しかけると

「ス」

と気持ち良さそうに眠っている由香がいた『ハア』俺が溜息をつくと由香がいない方の腕も重くなりそちらをみると、リンと舞が笑顔で俺の方を見ていた

その眼には『リンも、舞も』と何かを訴えて来ていたそして俺が何かを言う前にリン、舞共に夢に落ちていた『早っ！』とびつくりしながら自分の状態を確認した・・・そして5分後・・・俺は夢のなかだったそして暫くして俺が起きるともう十一時半で

「遅刻だぁあああ！！」

と叫び両腕に寝ていたリン、舞、由香が跳び起き三人そろって

「「「何！！！！？？」」」

と言って次に時計を見た由香が

「遅刻だぁー！！」

といって道場から風の用に走り去った、それに続く用にリン、舞、俺も走りだしたがリン、舞は笑顔で

「「遅刻だぁー」」

と騒いで俺の背中に飛び乗りリンが

「お兄ちゃん、遅刻するのぉ？」

と笑顔で聞いて来て無視して進もうとすると

「銀兄、遅刻かぁ」

と舞が俺の足に捕まり笑っていた「遅刻だ！！つかお前らも遅刻だから早く学校の準備してこい！！置いてくぞ！！」

俺が言うとリン、舞は笑って学校の準備をするため自分の部屋に走って行った。

自己紹介が遅れたが俺の名前は藤野銀次（ふじの、ぎんじ）身長178cmで顔もごく普通だと思う。（想像にお任せします）そして色々会って今はこの草野家にお世話になっている。

「銀次、何やってんのぉ、行くよぉ」

とゆったりした口調で話しかけて来たのがこの草野家の長女の草野由香だ。身長は俺より20cm程低く俺の胸に調度顔が当たる程度の背で髪はストレートで黒く腰の辺りまであり、顔は可愛い系だと思う。

「銀次何してんのぉ！？遅刻しちゃうよ！？」

「もう遅刻してるから！！んなことよりリンと舞は！？」

俺が言うと同時に俺と由香の背中にリンと舞が抱き着き

「「終わったよぉ！！」」

と言ってきた。ちなみに俺に抱き着いてきたのが草野リンで年のせ

いか家で一番の甘えん坊だ（銀次と由香が18才、舞が8才、リンが7才だ）そして由香に飛び付いたのが草野舞でかなりのおてんば娘だなにかあるとリンと一緒に騒いでいる。

「おし、とりあえず早く行くぞ！！」

「うん」

「「はぁーい」」

## 第一話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。これからも頑張るので楽しいと思えた人は続きも読んで下さると嬉しいです。



## 第2話（前書き）

読んで頂きありがとうございます今回も少し長いですが最後まで読んでいただければ幸いです。

## 第2話

今俺は寝坊してしまい由香、舞、リンと学校に向かっている。そしてなにげなく後ろを走っている由香達を見るなんか一人足りないよ  
うな・・・俺が止まると後ろに走っていた由香、リンは俺にぶ  
つかった『ドン』

「ふぎゅ」

由香とリンは同時に変な声を上げた。

「由香・・・」

「いったあゝ、どうしたの急に止まって？」

由香は俺を恨めしげに見る

「舞がいない・・・」

「えっ・・・」あの野郎またいなくなりやがった！！今月に入  
って何回めだ！そんな事考えてるとリンが俺を『どうしたの？学校  
は？』てな感じで見ていた・・・『ハア』俺は溜め息をつき  
由香の方を見て呟く。

「由香また頼むわ」

「う、うん・・・」

由香は苦笑いをしていた。

由香は右手を胸の前に出し握る。

「《方位神》（ほういじん）」

と呟くと右手を開く。開いた由香の右手に乗っていたのは方位磁石

のような物があつた。由香が方位神に向け『草野舞』と静かに言う  
と方位神の針が南東の方向に向いていた。

「あつちか。」

俺は由香の方位神を見て南東の方に走りだす。

俺が走りながら由香に

「本当由香の方位神は便利だな、得に舞とか探す時は」

「あはは、でも一度顔を見た人で名前を知ってる人じゃないと捜せないけどね」

そう由香のスピリットの方位神は顔を見てなおかつ名前を知らない  
と意味を成さない物らしい。それでもやっぱり便利だと思う。舞な  
んかはいつも気付いたらいなくなってる事が多いのでよく由香の方  
位神を使い捜している。そしていつもいなくなった舞を捜しだし見  
つけると

「銀兄い」

と泣いて俺のところにくる。草野家の人は皆泣き虫のようによく泣い  
ている所を見る。

「舞、なんでこんなところにいるんだ？」

俺が疑問に思ふ事を素直に口にした

「ヒック……だって前に銀兄達と来たから……ヒック……  
いると思つて……」

舞が居たのは先週の土曜に来たゲーセンだった。『ハア』俺は溜  
め息を着き静かに舞に

「今度から離れるなよ」

と一言、言って舞の頭を撫でた。舞は安心したような表情を見せると俺に抱き着いて来て『……っ……ック……』声を殺して泣いて居た。その時由香とリンは『やれやれ』といった感じの表情を見せて微笑していた。

舞が落ち着くまでの間近くのベンチに四人で腰かけていた舞は泣き止むと俺の腕の中で『ス』と寝息を立てていた

「おい、舞起きろ学校行くぞ。」

『ん』

俺は舞の寝顔を見た後由香を見ると『頑張っ』って目で言っていた。『またか』と思い俺はゆっくりと舞を抱き抱え、由香、リンと学校に向かった。

結局学校に着いたのは昼休みの終わり頃だった。

俺は寝ている舞と途中で『わたしも』と言って寝たリンを先生に任せて俺達も自分達のクラスに向かった。

俺達が通う桜木高校は、保育園から大学まである変わった高校だ俺は中学三年の終わりにこの学校に来た。そしてエレベーター式でこの高校に入学して今に至る。俺と由香は職員室に行き遅刻届けを書き担任の荒縄あらなわという先生に小言を言われてから教室に入る。俺と由香は同じクラスで教室に入る

「銀次〜やつときたのかよ、今日はもう来ないと思ったんだけどな」

俺に真っ先に話しかけてきたのは俺の親友、そして相棒の真田刃さなだじん

「なんだよ来ない方がよかったのかよ？」

俺が冗談で言つと刃が

「うん」

平然といいやがった！しかも真顔で即答！

「刃てめえ」

「ははっ冗談だよ！冗談！んなこともわかんねえのかよ」

「てめえのは冗談に聞こえねえんだよ！」

「なんでだよ！？」

俺と刃が言い合いしていると横から

「ストップ！！！」

と由香が怒鳴った。

「銀次、またご飯抜きにするよ」

そう言った由香は笑ってはいたが目が笑っていなかった。俺は素直に頭を下げた。いつものんびりマイペースの由香だか俺がなにかするとこうなるだから俺は由香には逆らえないし逆らわない。

## 第2話（後書き）

第2話をご覧頂きありがとうございますこれから楽しい小説を書いていかたいと思うのでよろしくお願いします。

### 第3話（前書き）

前よりも長いです。楽しんで頂いてる事を祈って頑張ります。

### 第3話

授業が終わり放課後。

俺は由香と一緒にリン、舞を向かいに行った。向かいに行くと言っても同じ学校の敷地にいるのですぐに着く。暫く学校の玄関前で待っていると

「由香姉え」

「お兄ちゃん」

と言って俺と由香に飛び付いてきた。俺はちょっとふらつきそうになるがいつもの事なので耐える。

「お兄ちゃん、おんぶ」

俺に満面の笑みを向けた小さな悪魔は俺の返事を聞かず俺の背中に周りこみ首に手をまわした。

「お兄ちゃんの後ろとつたあ」

と言って俺から絶対離れようとしな。『ハア』俺が溜め息をつくと足元で舞が拗ねていた。舞の目には『ずるいい』と言った感じがあつた。俺がどうすべきか考えていたら由香が

「舞いゝ今日は私がおんぶしてあげよつか？」

と助けてくれた。舞はその言葉を聞いて『パァ』と明るくなり

「うん!」



といって由香の背中に飛び付いた。それから家に帰る道ではリンと舞の今日どんな事があったのかを話ながら家に向かう。いつもは寄り道をしないで家に向かうが食品がきれかかっているのを思いだし四人でデパートに入った。その時に舞が由香の背中から飛び降りたのでリンを降ろそうとすると

「もつとお〜」

と涙声で言つて来たので仕方なくおぶつたままデパートに入る。その時由香が『買い物いつてくるから銀次と一緒にいるんだよ』と言つて俺とリン、舞を置いて食品売り場へと向かつて行つた。由香がいなくなるとリンと舞が俺の膝に寝転がり

「「おやすみ〜」」

といつて寝た……。『早っ！』と俺はまた驚いきどうするか考えた……。結論……。黙つて寝かせとく。俺はリンと舞の頭撫でみると二人は『ん〜』と嬉しそうな顔をして夢に落ちていた。30分くらいして由香が

「ごめん〜、少し遅くな……。大変だねえ、銀次？」

俺の今の状態を見て由香は呟いた。

「舞を頼み」

と言つてゆつくりと舞を由香に渡し俺はリンの体をお姫様抱っこ見たいに抱き抱え由香と一緒に家へと向かつた。

帰り道由香が突然真剣な顔をして

「銀次も変わつたねえ〜」

「なんだよ、いきなり」

由香は俺の顔を見て

「昔は持つと鞘のない刀見たいな目してたからね」

「おかげでいつも舞とリンに泣かれたな……」

「でもあの事があってやっぱり銀次は変わったね。怖かったけどすごい嬉しかったもん。それに銀次の笑った顔始めて見たのもあの時だったもん」

俺はその話を苦笑いをして聞くしかなかった……

俺が初めて草野家に来た時俺は由香達の父さんを殺そうとしていた。俺はその頃どこかの組織に雇われて由香達の父さんを殺そうとした。でも殺せなかったんだ由香達の父さんが俺より強かった訳じゃない。強かったのは……

由香、リン、舞の三姉妹だった。

力が強いとかじゃなくて純粋な思いが強いと思った。そして俺はそこで始めて家族を知り、『愛』を知った。俺にしがみつく姉妹を見て俺は力がなくなりその場で気絶した。次に気がいたら知らない家のベットでその横に三姉妹が寝ていた。俺はいつも安心して寝れなかった。だけどそんな俺が初めて安心できた。『ここなら大丈夫』そんな気がした。俺は二度めの睡眠という行為にでた。安心できた。そして俺が次に目を覚ましたのは二日後だった。俺が起きると三姉妹はいなくなっていてかわりに目の前に俺が命を狙った人がいた。その人は静かに、でもしっかりと言った。

「家族にならないか？」

と。俺はその後どうしたかとかは覚えてない。覚えているのはその

人に言われた

『彼女達を守る事』

それから俺は草野家に住んでいた俺はその時14才だった。そして俺が目覚ましてから一ヶ月たった頃

『あれ』が起きた。

### 第3話（後書き）

前話より長くてすみませんこれからも過去を語りますが後一話程度で終わります。

## 第4話（前書き）

読んでくれている人本当に感謝しています。

## 第4話

俺が目を覚まして一ヶ月がたった。

リンと舞という子供はまだ俺の顔見たら泣きだし姉の由香の後ろに隠れ俺を見ている。なんで舞とリンが俺を見て泣くか・・・そんな事俺にだってわかった。俺は笑えない。感情を表に出せなかった。どんな事も無表情でこなしていた。そんな時三姉妹がいなくなった。三姉妹をさらったのは俺がいた組織だった。ただ一言伝言で

『親を殺さなければ三姉妹を殺す』

と・・・俺は何故かわからないが気がついたら組織のアジトに一人で挑んでいた。

俺のスピリットは槍。槍の柄尻には釣の重りに似ている物が着いておりそれは俺の意思で大きさを自在に返る事が出来る。普通の状態は縦に30cm横に15cmにしてある。槍の刃の所は二対の70cm程度の刃が着いている。柄の長さは約2mある。そして斬戟を飛ばす事が出来る能力がある。これが俺のスピリットである

『鬼神戦神楽』きじんいくさかくら（これからは『神楽』となります）

俺はスピリット『神楽』を右手にだし光速の一振りをアジトに叩き込んだ。そしてそれを合図にしたように次々とだれ出てくる敵を薙ぎ払って行き敵の一人を殺さず両手、両足の骨を折り首に『神楽』を突き付け

「由香達は何処だ？」俺は敵から居場所を聞き出し（当然、敵は全て殺したが）由香達がいる部屋に向かった。部屋のドアには鍵が掛かっており普通だったなら開かないが俺の『神楽』にはどんな物であろうと関係ない。

一閃。

ドアどころか周りの全てを吹き飛ばし俺は部屋の様子を見た中には殴られたのか三姉妹がぐったりとしていた。その隣に人影があった様な気がした。俺はその全て（三姉妹を除く）を

『神楽』で吹き飛ばした。由香、舞、リンはどうやら多少殴られたようだが外傷もあまりなかった。俺は由香を中央に抱き抱え、リンと舞は両腕によしかかるように寝させ俺は自分の力のなさを実感していた。まだ会って一ヶ月しかたっていないが俺は由香、舞、リンを守りたい守らなくちゃ行けないと思っていた。もの思いにふけていると正面に抱き抱えている由香から『ん』と聞こえた

「由香大丈夫か？おい、由香」

「ん、……。あれえ、銀次君なんているの？私変な人達に連れてこられてそれで……。」

最後の方の声は殆ど聞こえないような声だった。そして隣にいる舞、リンも意識が戻った。

「「???」」

何がどうなったか解らないという感じで見てくる二人を見て

「もう大丈夫だ」そういった俺の顔を巨額の表情で見てくる三姉妹・  
……。俺が耐え切れなくなり

「どつした？」

と聞くと由香、舞、リン三人が笑顔で

「『笑ったあゝ！』」

と叫んだ。その後暫くして疲れたのか由香、舞、リンは眠りについていた。俺は舞、リンを両肩にのせ頭によしかかるようにのせ由香は両膝と背中を持ち顔を自分の胸へよしかかるようにした。俺はその状態を草野家につくまでしていて草野家に着くと真っ先に由香の父さんに叩かれた。

「もしもの事があつたらどうするんだ！？」

由香達の父さんは俺をにらみ胸倉を掴みそういった。「俺が命に変えても守りきる覚悟あつたから」

俺が答えると由香達の父さんは優しく

「由香達もそうだけど、銀次。君にも何かあつたんじゃないかと思つて言っているんだ」

と静かに言つた。

「どうして？どうして他人の俺の事まで心配するの？」

答えはわかつていたと思うそれでもどうしても本人に聞きたかつた

「銀次も私の家族だよ」

この言葉を聞いて俺は初めて大声だして泣いた。悲しい訳じゃない。痛い訳じゃない。これは嬉しいからだ。嬉しい・・・俺は素直にそう思つた。だから今日から俺の自分の藤野銀次の始まりだと思つた



#### 第4話（後書き）

まだ長く続くと思うので、よければ完結できるまでお付き会い願います。

## 第5話

「そんな事もあつたな・・・」

俺小さく呟くと隣の由香が

「それにあれから銀次の事リンが『お兄ちゃん』舞が『銀兄』だもんねえ。」

「それから二週間ぐらい俺のベットにかつてに潜ってきて騒いでたしな・・・」

そんな昔の事を話して帰っていた。家に着くと計っていたように舞とリンが跳び起き俺と由香の背中から離れ

「銀兄！！かくごお」

「かくごお」

と言って俺の左右から跳び蹴りをしてきた。俺は何事もないかのように舞とリンの跳び蹴りしてきた方の足を掴み

「さつさと着替えてこい。そしたらちゃんと遊んでやるから」俺がそういうと舞とリンは笑顔で自分の部屋に走って向かった。その場に残された俺と由香はいつもどおり家に入り俺は部屋に向かい由香は台所でご飯支度をするため向かっていた。・・・・・・  
暫くして・・・・

「・・疲れたあ」

と俺、舞、リンの三人が晩飯求めて台所に来た。時間はもう19時30分で由香がちょうど支度を終えて俺達を呼びにいこうとしていた時だった。四人で晩飯を食べ終えた時ちょうど由香達の母親が帰ってきた。

「お帰り、お母さん。あれ？お父さんは一緒じゃないの？」

由香が母親に問うと母親は無言で由香に近づいてきた。由香はいつもと違う雰囲気をもつ母親に恐怖を感じ少しづつ後ろに下がって行く。

俺は何か違和感を感じ母親を見て眼を見開いた。

「舞、リン。眼と見た耳を塞いでこっちを向くな」

「「えっ……」」

と言って俺の隣に座っている舞、リンは後ろを見ようとしたが

「見るな！！！！」

と俺の怒鳴り声を聞いて眼と耳を塞ぎ小さくなった。俺はそれを確認すると再度母親の方を見て

「由香逃げろ！！！！」

と言って母親を蹴飛ばし由香の前に行く。由香は何が起きたかわからないような顔をしていたが「逃げるぞ！！ここは囲まれる！！」

と言った俺の声で『ハッ』とし舞、リンを抱え家から出た。舞、リンは俺の言い付けを守っているので小さくなっていた。俺は抱えているリンの頭を撫でた。

すると舞はゆっくりと眼を空けて俺の顔見てきた俺は笑って舞の顔を見て

「少し寝てろ……」

と言ひ舞はその言葉を聞き俺へと体を任せ樂にした。リンを抱えている由香は既に眠りに着いていたリンを見てから俺に

「銀次、どうしてお母さんから逃げたの？」

由香は全くわからないといった感じ俺に聞いてきた。俺は何も答えず俺のスピリット『神楽』を出す。

『神楽』を見て由香は驚いたがすぐにいつもの由香に戻って『これからどうするの？』と聞いて来たので俺は答えず口だけで『真田刃のそこに行く』と言った。由香はスピリットの『方位神』を出し『真田刃』と言う。すると方位神は北に針を向けた。

「北か……刃にあつたら由香、舞とリンを頼む。」

「えっ……どうゆうこと？」

「それは……」

「おおーい！！銀次、どうした？」

俺が由香の問いに答える前に真田の俺を呼ぶ声が聞こえ由香は黙った。俺の右手の『神楽』を見て真田は真剣な顔になり

「どうしたらいい？」

と聞いてきた真田と俺達の前に突然体長2m近くの男が上から落ちてきた。

「こいつらを潰す！！」

俺は舞を真田にまかせると『神楽』を横殴りに振るい男を胴体から真つ二つにした。男は本来流す血を流さずにちいさな爆発が起きた。

俺はその様子を見て

「刃、どの奴らかわかるか？」

俺の問いに真田は真剣な顔で

「組織に戻ってみたいとわかんねえなでも多分狙いは……」  
「俺達の誰かか……」

## 第5話（後書き）

やっと話が動き出しました。これからお願いします

## 第6話（前書き）

すごく長いです。今までで1番長いです。楽しんでください。

## 第6話

俺、由香、舞、リン、刃の四人は今真田家の居間にいる。

「……でどうすんだ、銀次？このまま逃げて戦うか？」

「逃げはしない。俺は由香達を守らなくちゃ行けないからな」

俺と刃が話しているとき由香は話の内容をじっと聞いていたが舞とリンはさっぱりってな感じで二人でじゃれあっている。

「とにかく、組織で聞いてくるよ」

「ああ、頼むよ刃。とりあえず俺達は帰るよ、ありがとな刃」

「気にすんな相棒。そのかわりなんかあつたら俺に言えよ。背中ぐらいは守ってやつからよ」

「そりゃ頼もしいこつて」

会話が終わると俺は由香達に視線を向けた舞とリンは真田ん家の物を荒し回っている。そしてソファに座っているはずの由香がいない事に気付いた。（俺と刃はソファの後ろのテーブルにいるのでソファに座っているなら見える筈だが）俺がおかしく思いソファに近づく

「ス」

と寝息をかいいて気持ち良さそうに寝ている由香がソファに寝ていた。

「どうした銀次？草野になんかあったか？」

真田がソファに近づきソファに寝ている由香を見ると



「頑張れ銀次。そんなにここからなら遠くないだろ？それに今日ビジネスホテルに四人で泊まるんならそれまででいいんだから」

「ハア！！刃お前何言っただ！？」

「なんだ違うのか？」

「たりめえだろ！？そんな金ねえし！」俺が金がない事を言つと刃が『ハア』と溜め息を付き俺に

「じゃあお前はまた母親のそこ行つて襲われてくんのか？」

「それは……………」

「金なら俺がなんとかしてやるから。それに舞ちゃん達ももう眠そうだぜ」

舞とリンはハシヤギ疲れたのか寝ている由香の隣でうとうとしていた。

「……………わかったよ、本当に金はなんとかしてくれんのか？」

「おう！何回も言っただろ、それになんかあつたらホテルから俺んとこに連絡くるから」

「なんで？」

「俺の親父んとこのホテルだからなんかあつたら俺にすぐ連絡くるってこと」

「刃の親父さんのホテルって前にお世話になつたあのデカイところ？」

俺が引いた顔で聞くと刃が

「なんだ、嫌なのか？」

「嫌って訳じゃねえんだけどさ……………」

刃の親父さんのホテルはテレビなどでも紹介されている『超』がつ

くほどの高級ホテルだ

「嫌じゃねえならいいだろ、さっさと行くぞ。」

そう行つて玄関に向かつて歩きだした刃に

「運転どつちがすんだ？」

と聞いたら刃が中指にあるキーを回していた。俺はその仕草を見た後

「舞、リンホテル行くから刃の車のとこ先行つてろ。場所はわかるな？」

「「うん」」

舞、リンはホテルと聞いた時目が光り、元氣よく返事し刃の車に向かつて走りだした。俺は舞、リンがいなくなるのを確認すると由香をお姫様抱つこで抱えゆつくりと刃の元へと歩いて行つた。

…… 30分後……

「悪いな刃。舞とリン持つて貰つて」

「気にすんなつて相棒」

暫く車に乗つて騒いでいた舞とリンは途中で俺によしかかるようにして寝てしまいそれを刃が抱えてくれた。俺と刃は無言で歩き部屋の前まで言つてドアを開けベットに由香、舞、リンを寝かせると無言で俺の顔を見て笑い部屋を出て行つた。俺は暫く刃が出て行つたドアを見ていたが由香の方に顔を向け

「由香起きてんだろ」

由香はゆつくりと上半身を起こし

「ばれてたかあ……」

「まあな、四年くらいしか一緒にいねえけどあれくらいならすぐにわかる」

由香は舞とリンを起こさないようにベツトからでると俺が座っていたソファの隣に座り

「明日学校行ける？」

「行きたいか？」

俺が逆に質問すると少し困ったようにしたが俯きながら

「行きたいかなあ……」

静かにそして小さくそういった由香の顔は今にも泣きそうな顔をしていた。俺は由香を抱きしめた。

「銀次？」

と驚いたように聞いてきた由香に俺は黙って由香の頭に手を置き黙って少し強く抱きしめると

「また…友達と離れるのかな………やっと普通の生活に戻ってきたと思って三年間、楽しく過ごせると思ってたのに………後もう少しのところで壊れちゃうのかな………」

由香は泣いていた。声を殺して泣きながら、俺に話かけてくる

「ねえ………また学校も行けないのかなあ………また誰か死んじゃうの

かなあ」

「んな事ねえ……」

俺は由香の話に始めて口を挟んだ。

「俺がもう誰も殺させない。相手がどのどいつだろうと俺が絶対由香を守る。由香の大切にしたいものを俺が守る。だから……信じろ」

「っ！……！」

由香はすごく驚いていた。俺が信じろと言ったのは由香に二度めだった。由香は俺の言葉の『信じろ』の意味を1番知っている。

「うん……うん……」

由香は何度も頷く。頷く度に『うん』と小さく言っただけで俺の話聞いていた。

「学校にも行っただけいい。」

学校には刃だっているし俺達二人で絶対に学校の奴らには指一本触らせない……だから由香、笑ってくれ……由香の笑顔や笑い声明るい声は俺の力になるから。由香が笑っているだけで俺の力になる。だから由香の声が聞きたい、由香の笑顔が見たいから、だから俺は由香を守るんだ。それが俺の力になるから……」

俺は言い終わると由香を身体から離し由香の顔を見る

「だから由香笑ってくれそれが俺の1番力になるから………な？」

由香は下をむき眼を何回か擦り

「これで……」

由香は俺の顔を見た

「……………いい？」

由香は笑顔を俺に向けた。

「ああ、それでいい……」 もう一度由香を抱きしめ言った

「もう泣かないでくれよ」

「うん!!」

由香は笑顔で俺を見ていた。その時ベットから舞とリンが

「「ううど」お」

と言って眼を覚ました。舞とリンはまだ寝ぼけた眼で俺達を見ると

「由香姉だけずるい」

「ずるい、お兄ちゃんリンも」

といて二人共俺に抱き着いて来た。俺は舞とリンの頭を撫でてやると

「「へへ」」

と嬉しそうにしていた。

『俺はこの三姉妹、由香、舞、リンだけは何があっても守ってみせる』と心に誓った。その後は寝ている俺のベットに由香、舞、リンが入ってきて（ベットは以上にでかいので狭くなかった）

「リンも一緒に寝る」

「舞も」

「私も」

と言って勝手に俺を挟む用に由香と舞が居て俺の上に乗るようにリンが寝て三人とも俺の顔を笑顔で見ていた。俺はこうゆう時の三人は何を言っても聞かないのを知っているので

「わかったよ」

と言うと右側に居た由香が俺の右腕を腕枕にすると

「舞も腕枕」

と言って左腕を掴み枕がわりにし満足そうに眼をつむった。俺の上にいるリンは俺が右腕で（由香は肘から肩の部分にいる）頭を撫でていると眠りに着いた。

最後に由香が俺の耳元で

「おやすみ」

といって顔を赤くしていたのを気付く

「おやすみ」

俺が返すと由香は満足そうな顔をして眼をつむり眠りに入り、三人から

「ス」

と寝息をたてているのを確認して俺も眠りについた………

## 第6話（後書き）

ありがとうございます。これからこれ以上長いのが出てくるかもしれません。よろしくお願いします。



## 第7話

俺は眩しさを感じ目を覚ました。俺が起きても由香、舞、リンの三人はまだ寝ていた、俺は由香の頭を撫でると

「ん」

と由香が起きた。

「おはよう」

と言つて俺の顔を見た後時計を見た。時刻は朝の7時13分舞とリンを起こし朝飯を抜きホテルでこれからを話あった。

……………結論……………

今までどうり過ごす事にした。由香、舞、リンがそれを望んだので俺は拒まない。俺達は一度家に戻る事にした。

家につくと荒れてはいたが得に怪しい奴もいないので部屋から必要なものを取り一度ホテルに戻り学校の準備をする。

ホテルを出ると刃が立っていた

「どうした刃？」

刃は無言で刀系スピリットの

『破滅』（はめつ）

を出し右手に持ち俺を見ていた

「なんのつもりだ刃……」

刃は無言でこちらに近づいてくる。俺も『神楽』を出し右手で柄の中心を持つ。俺と刃との距離が10m程の所で

「悪いな、相棒。消えてくれ」

と言って右の肩を回している。由香、舞、リンの三人はなにが起きたかわからないという表情で俺と刃の顔を交互に見ていた

「やだといったらどうすんだ？」

俺は神楽を肩に乗せた状態で聞いた

「力づくでも消えてもらう」

刃が右肩を回すのをとめ『破滅』を地面にさすと俺と由香、舞、リンを囲むようにスピリットで武装した集団が出てきた

「消える銀次」

と刃が言ったのと同時に俺と刃は距離を詰めた。お互いのスピリットがすれ違う瞬間刃は俺の左側に飛び出す、俺はその逆に同時に飛び出し俺達を囲んでいる連中を吹き飛ばす。刃は俺とは逆にいる奴ら切り倒していく。一瞬で囲んでいる奴らを倒し俺は由香達の方に駆け寄る。

「大丈夫か？」

俺の顔を見て由香は驚きを隠せない表情でいた。舞とリンは

「「つよい」」

と興奮していた。そんな俺達に刃が近づいてきて舞とリンを車に乗せ俺と由香にも乗るように指示して来た。

車の中で由香は疑問をぶつけてきた

「どうしてさっき真田くんに切り掛からなかったの？」

「なんかその言い方だと俺を切り倒して欲しいような言い方だな……」

俺は苦笑いをして

「刃が右肩を回したからさ」

「？どうして右肩を回すと敵じゃないの？」

「俺達のなかの合図みたいなもんさ。刃が右肩を回したら俺が左側の敵を、逆肩だったら逆の奴を、ただそれだけだよ」

由香はまだ混乱していたがほっというて刃に話を持ち掛けた

「刃、あいつらどこのサイボーグだ？」

「『ウインドウ』だ」

「はあ？『ウインドウ』ただの医療機関だろ？なんでサイボーグなんかくんだよ？」

刃が言った『ウインドウ』とは世界一とも言える医療機関だ

「そこで死んだと見せ掛けてそいつを人体実験の道具にしていたとしたら？」

「っ！……でも死んだとしたなら遺体とかの問題があんだる病院の

奴を死にましたとか言って人体実験に使うのは無理だろ」

「戦場だよ」

刃は憎しみのこもった眼で前を見て運転している。俺がどうゆうことだと考えていると

「戦場で人を拉致って死んだ事にする。そしたら誰にも怪しまれず遺体も見つかりませんですむからな……………」

「……………刃君、それ本当の事なの？」

黙って俺達の話聞いていた由香が刃の言葉を聞き直した。その声はいつものんびりマイペースで明るい声じゃなく怒りや憎み、などの感情入っており舞とリンは俺の服にしがみついて顔を埋めていた

「……………残念だけど本当だよ草野……………」

「……………そう……………」

由香は途端に顔を俯き小さな声で

「……………ごめんなさい……………ごめんなさい……………」

「……………由香どうした？」

俺は由香に訪ねると由香は

「ウインドウの社長は……………なの」

「なに？由香聞こえないよ」

「お父さんなの……………」

「えっ……………」

「『ウインドウ』の社長は私達のお父さんなの……………」

「……………っ……………本当なのか？」

由香は小さく頷いた。俺は刃の方を見ると知っていると云ったような顔をしていた。

「刃、今からそこむかえるか？」

「無理じゃないが……どうすんだ？」

「全部を聞き出す。それが守るためになると思うから……由香どうする？着いてくるか？」

「わかんない……わかんないよお……誰を信じていいのかもわからないよお……どうすればいいの？……どうすれば……」

由香は混乱していた。目には涙を溜めて繰り返していた。俺は刃の方に向き

「明日また来てくれ今はまだ答えがでない」

「わかった」

刃はそういうとまたホテルへと向かった。

……ホテルにて……

ホテルに着いた俺達はまた四人で同じ部屋をとりソファに座って黙りこんでいた。俺は舞とリンに

「刃のどこに行っていてくれるか？ロビーにいるから」

「うん……」

元氣なく返事をした舞とリンはそのまま部屋をでていった。それを見ていた俺に

「どうしたらいいの？……誰を信じればいいの……ねえ、銀次……教えてよ……」

由香はまた泣いていた。俺は由香の肩に手を置いて、俯いている由香の顔を覗き込む。

「由香お前が思うように動いてくれ………そしたら俺は由香の思いを貫く槍になるから……俺がお前を支えてやるから………」

しばらく由香は黙って俺の顔を見ていたが

「ずるいよお、そうやってこういう時ばっか優しくしてえ………そんな事言うからどうしても銀次に甘えちゃうよお」

由香は俺に抱き着いてきた

「甘えていいんだよ、由香は一人じゃないんだだから甘えていいんだよ………」

由香は黙って何度も頷いていた。

由香が泣き止み俺の顔を見て

「お父さんのところにいかなきゃ………着いてきてね、いやだとは言わせないから………」

「俺は由香の思いを貫く槍。俺の槍の主に従うまでだ」

「うん」

俺と由香はそのまま刃のところに向かうと舞とリンが泣いていた

「「うわあゝん」「

と言って俺の足にしがみつき服に顔を押し当てて泣いていた。俺と由香が混乱していると刃が

「『お兄ちゃんと由香お姉ちゃんに嫌われたあゝ』って言って俺ん  
と泣きながら来てたぞ」

俺はあの時の自分の表情を思い出した。自分では普通のもりが舞  
とリンには怒っているような雰囲気を纏った俺が『刃のどこ……  
…』って言って嫌われたと思っていたらしい俺がリンを由香が舞を  
抱き上げてそのまま抱きしめ頭を撫でてやる

「俺が舞やリンの事を嫌う訳無いだろ」

「だって……ヒック……あの時……お兄ちゃんとお姉ちゃん……  
ヒック………凄く恐かったん……ヒック………だもん………ヒッ  
ク………だから………」

「そつかあ、ごめんな不安にさせて……でもなリン舞」

「……ヒック………なに？」

「俺はリンの事大事だし、好きだからな、俺はリンと舞好きだから  
嫌う事なんて絶対ないよ、リンと舞は俺と由香の事嫌いかな？」

「ううん、好き」

「なら信じてくれよ、俺と由香は舞とリンが好きだよ、な？だから  
もう泣かないでくれよ。俺は舞とリンの笑ってる顔を見たいな」

俺が喋ると舞とリンは俺と由香に向かって

「「うんっ！！」」

と言って笑ってくれた。刃がその様子を見て『やれやれ』って感じ  
で見てる

「明日でいいのか？」

俺と由香は無言で頷く。刃はそれを見て笑い帰って行った。

「舞、リン明日は早いからもう寝るか？」

「お兄ちゃんも一緒に寝る〜」

と言っていたのでベットに四人で入り昨日と同じ用に眠りについた。



## 第7話（後書き）

もう少しで一度終わります

## 最終話（前書き）

第一部完了です。ありがとうございましたm——m

## 最終話

深夜2時

俺は周りで寝ている由香達三人を起こさないようにゆっくりとベッドから出る。

「ごめんな由香……」

俺は部屋に手紙をおき部屋を出てロビーに行く。

ロビーには刃が居て俺の事を確認すると手に持っていたキーを俺に投げてよこした。

「持つてけ、そのかわり傷付けないで返せよ」

「無理だな」

「んじゃ変わりに帰ってきたら殴らせろそれで勘弁してやる」

「無理だな」

「………我が儘言つてんじゃねえよ、俺はこれから起きる草野姉妹の相手もしなきゃならねえんだぞ」

「頑張れ」

「やだ、全部話すからな」

「どの辺りから？」

「お前が由香の事を好きな事辺りから」

「………死ね………」

「なら帰ってきたら殴らせろ。それで勘弁してやる」

「………一発な」

「5発な」

「多すぎ」

「んじゃ3発」

「生きてたらな」

「おう、死んで帰ってきたら顔ボコボコにして埋めるから」

「……………行くわ」

「おう、相棒」

『パチンっ！！』

俺は刃とハイタッチしてホテルから出ていく。

「死ぬなよ」

俺は刃の一言に苦笑いで答えそのまま何も答えず車に乗り込み走り出す。

俺は車のなかにあるモニターからの指示に従い目的地へと向かう。モニターには『目的地、ウインドウ本社』と表示されている。

3時46分……………ウインドウ本社に着いた。

勿論めんどい事はせず突っ込む。右手にスピリット『神楽』左手にスピリット『鬼神』俺のスピリット『鬼神戦神楽』は本来二つで一つの武器である（形は両方とも同じである）俺は正面から堂々に入る。中に入ると警備員らしき人に俺は右手で顎をぶん殴り気絶させた。同時に至る所からスピリットを持った『人間』がでてきた。

「雑魚が」

上に向かって跳び両腕をクロスさせるように振る。

『神楽』『鬼神』から出てきた斬戟をまともに受けた人間は床につぶくように倒れる。その場にいた武装人間は全員戦闘不能に陥った。その場所から下に向かい人体実験をしていると思われる地下に移動する。そして地下の無駄に広いところにする。その中央には人影が一つあった。その人影は俺の方に徐々に近付き顔を表す。その人影は

「おじさん」

由香達のお父さんだった。

「やあ、銀次どうしたんだいこんな所で？」

「聞きたい事があってな」

「なんだい？」

「おばさんに何をした？」

「特に何もしてないさ。ただちょっと人体実験はしてはいけな  
いか言つて邪魔してくるから」

「そんな理由でサイボーグにしたのか？」

「そうだよ、何かおかしいかい？邪魔をするものは全て消す」

「それがあんたのやり方か？」

「ああ、そして銀次。君も邪魔だ。だから……消えてくれ」

突然由香達のお父さん草野ケイの周りに風が吹き荒れる。

『スパッ』俺は頬に痛みを感じ触る。

『ドロツ』で感触が指に伝わる。

「どうだい僕のスピリット『風陣』<sup>ふうじん</sup>は」

俺は無言でケイの方を見る

「近づいてこないのかい？所詮はガキだな傷ができる恐怖で何もで  
きないなんてな」

「……………ないのか？」

「ん？」

「戻るきはないのか？今まで人体実験に理由してきた人達に詫びる  
きはないのか？」

「……………」

「あんた由香や舞、リンの父さんだろ。あいつらになんかいうこと  
ねえのかよ」

「……………ククク……………」

「何かおかしい？言うことはねえのかあるのか聞いてんだが」

「ないね！！全くないね！！詫びるきはないのか？あるわけないじゃないか！！由香達に言うことはないかだってあるわ『ズバツ』」

『ゴト』

「その後の言葉は首だけでかたれ……由香達は俺が守るから」

もはや首から下がない。俺は首から上をしばらくぼうぜんと見ていたが背中を向け刃に連絡を入れようとすると『ガシッ』と足を何かに捕まれた。そこには首から上がない体があった。

「なっ……………」

その体はゆつくりと立ち上がる。俺は思わず距離を取ると突然『神楽』『鬼神』が手から消えた。俺が驚いて啞然としてるところから声がして広場に響く

『スピリット破壊兵器。発動完了。これより世界のスピリットを破壊します。』

スピリット破壊……………」

「なんだそりゃ、んな事あんのかよ……………」

俺は啞然としながらも自分のスピリットが出てこない事がわかった一人で何があつたかを考えていた

……………結論……………」

「ま、いいか」

俺は難しい事を考えるのは得意じゃないしな。俺はそう結論をだし由香達の元に戻って説明しなきゃいけないと思いつながらそのままその場を後にした。

俺がホテルに戻り部屋に入るとボコボコになっている刃とその上で泣き叫ぶ舞とリンそしてソファによしかかり俯きになっている由香がいた。

「……………ただいま」

『バっ』と全員あわせて俺にふり帰り

「お兄ちゃん!!」

と真っ先に俺に飛び掛かってきたリンは俺を押し倒し『うわぁ〜ん』と膝の上で号泣した。

「銀兄!!」

とって俺の腕にしがみついてきたのは舞だ。舞も同じように腕を掴み顔を腕に押し付け号泣。

「銀次〜」

と呼び俺に修羅のような雰囲気で近づいてくるのは刃だそくざに俺へと蹴り右フックを噛ましてくる。俺がそれをくらうと泣いていた舞とリンが刃に飛び付き

「いぢめんな〜」

と言って刃の顔を引っ掻いたり噛み付いたり跳び蹴りかましたりしてボコボコにする。

俺はソファの方から何かを感じてその場に固まる。そのさきに

は無表情の由香がいた。

「舞、リン俺と一緒にロビーにいこうか」

「うん」

刃が危険を感じ舞とリンを連れてロビーへと行こうとした。それを見た俺は

「ちよつ、おい刃逃げんな!!」

「知るか!! お前が悪いんだから自分でなんとかしろ!! 俺は被害  
くいたくない!!」

といって刃はダッシュで部屋を後にした。

部屋にいるのは俺と由香。だが俺は固まって動けない。

「銀次」

「ハイッ!!」

感情が入ってない声で呼ばれ怯えた声で大きな返事をする俺

「こつちむいて」

俺はまるで金縛りのような間隔にあいながらも由香の指示どおり由香の方を向く（向くの2分ぐらいしかかったけど）するといつのまにか俺の目の前に由香が移動していた。由香の腕を上げたので俺は思わず『殴られる』思い眼をつむる。……痛みを感じないと思い眼をあけると腕を振り上げて止まっている由香がいた。

「……………由香？」



おかしいと思い声をかけると由香は俺に抱き着いて泣いた。

「バカア、……心配……ヒック……したんだから……ヒック……バカア……」

「ごめん、由香」

「今度……ヒック……こんな事勝手に……ヒック……したら許さないん……だからあ……」

「きみにめいじとくよ」

俺は由香の頭を撫でた。

「だから」

俺は由香の顔を上げて

「これで許して」

『チュッ』

俺は由香にキスをした。

由香はびっくりしていたが顔を放したら顔を赤くして俯いている。  
(もちろん俺も赤いが)

「……っかい」

「ん？」

由香が何か呟き俺が聞き直すと

「もう一回」

といって顔を俺に向けた。俺はまた由香にキスをした

俺は誓った。『俺が守る誰か敵になろうと関係ない。俺が由香、舞、リンを絶対守る』

三日後……

「やっぱわかんねえか」

「ああ、スピリットを誰も使えないんだもんなあ」

俺と刃でスピリットの事を調べては見たが全く解らなかった。

「まあ、なんとかなるさ」

「そうだな、のんびり行くかあ、なあ相棒」

「そうだなせつかく日常に戻ったんだ。まあまたなんかあつたら頼むぜ相棒」

END

## 最終話（後書き）

この後『能力者』に続きます。どうか今後もよろしくお願いします  
m — ( m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5094a/>

---

スピリット

2010年10月11日00時18分発行